

平成 26 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	26K20	氏名	青木 愛
研究主題 —副主題—	英語を書くことへの苦手意識を改善するための指導方法 —Dictogloss を活用してメモから始める—		
所属校	都立大泉桜高等学校	派遣先	東京学芸大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>世界は多文化・多言語の人達が協働する社会へと既に移行し始めている。外国語を用いたコミュニケーションを行う機会が今後ますます増えるため、日本の学校教育における外国語指導も今、大きく変わりつつある。</p> <p>現在の学校教育では英語を「話す」指導に力点が置かれている。「話す」指導を優先すると、相手に通じさえすればOKになりがちだ。しかし、交渉や契約書など、社会的に重要な場面では文字にして文を組み立てる力が必要となる。さらに、英文を左から右へ「書く」ことができるようになれば、それをそのまま声に出すだけで内容を整理しながら「話す」こともできるようになる。</p> <p>そこで英語を「書く」力に注目した。「書く」ことで、①自分の組み立てた英文を見直すことができ、②学習履歴を目に見える形で残すことができるからだ。「書く」力の強化こそ、今後の日本の英語教育で必要とされている分野であると考えた。</p> <p>そこで、積極的に文字を「書く」姿勢を生徒に身に付けさせたい。その学習方法として Dictogloss (ディクトグロス) に注目した。Dictogloss ではメモを取ることが必須活動であり、その他の効果も期待できるからだ。英語を書くことに苦手意識をもつ生徒に対して、まずメモで書くことに慣れさせながら、「書く」意欲を高めることを研究の目的とした。</p>
II 研究の方法	<p>Dictogloss とは、オーストラリア人の言語学者 Ruth Wajnryb (ルース・ヴァインリブ) によって 1990 年に発表された協働学習の手法である。その手順を簡単に紹介する。① 1 回目のリスニング (ノーマルスピード) では、内容を聞き取ることに専念させる。メモは取らせない。② 2 回目のリスニング (ノーマルスピード) を聞かせながら、内容上、重要だと思われるキーワードだけをメモさせる。③ その情報をグループ (3~4 名) で共有させ、聞き取った内容を英文で再現させる。その英文は、読まれた英文と全く同じにする必要はなく、同じ内容を表現できていればよい。④ 黒板を使ってクラスで発表させ、それを教員が添削する。その際、内容的に正しいか、文法的に正しいかという 2 段階において、全体の場で検討する。Dictogloss の利点は、生徒個々の力量に合った語彙や構文を使って表現しても正解となるため、「書く」活動への意欲が下がらないことだ。また、生徒の実態に合わせてリスニング内容の難易度を調整できることである。</p> <p>「高等学校学習指導要領解説」では、「目標は、英語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、①積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、②情報や考えなどを的確に理解したり③適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養うこと」としている (下線部筆者)。Dictogloss の活動をこれらと照らし合わせると、必要な情報を的確に受け取るリスニング能力を向上させ (下線部②)、各自のメモを見せ合ってグループ内で意見交換させ (下線部①)、そしてグループとして英文を再現させる (下線部③)。つまり、Dictogloss は学習指導要領で示されている活動目標に合致している。</p> <p>先行研究によると、Dictogloss の指導によって効果の表れた分野を、前田 (2008) はイラストを参考に自分の考えを書く活動、岩本 (2013) は文法能力の育成、と結論付けている。そこで筆者は今回、「書く」活動が英語運用能力の向上に効果があることを生徒に実感させ、「書く」活動を活発にさせたい。</p> <p>検証授業は、都立 A 高等学校で 2 期に分けて実施した。対象は第 2 学年の選択授業「英語表現 I」の 1 クラス、11 名の生徒だ。この授業は 2 単位で、同じ日に 2 コマ続きで行われる。私が以前に指導した生徒は一人もいない。授業担当者によると、生徒はみな真面目だが反応が全く無く、生徒に音読させる活動もあまり行っていない、とのことだった。</p>

<p>Ⅲ 研究の結果</p>	<p>第1期検証授業を終えた段階で、次の四点が明らかとなった。</p> <p>①Dictogloss を3回経験したことで、「書く」意欲の個人差の開きが小さくなった。</p> <p>②Dictogloss とは、英語を聞いて英語（文字）で再現する作業である。つまり、思考の途中に日本語を介入させないことで、英語を瞬発的にアウトプットする力につながる。だからこそ、メモは英語またはカタカナ音（聞こえたままの音）で書くことが望ましい。</p> <p>③Dictogloss の実施直後に、同じ文法項目を取り入れた自己表現文を書かせた。しかし5分経っても半数の生徒しか英文を書き上げることができなかった。理由を尋ねたところ、「英文の構造は理解していたが、書く内容が思い付かなかった」と答えた。このことからDictogloss が「外から入ってくる情報を受け取る活動」であることに気付いた。つまり、学習者が表現したい内容を吟味して書く活動が、Dictogloss には含まれていないのだ。したがって、第2期検証授業ではDictogloss と並行して、各々の生徒が書く内容を吟味する自己表現活動も行う。</p> <p>④ドリル問題では高得点を取るのに、自己表現活動になると制限時間内に書けない生徒がいた。その一方で、ドリル問題の得点は低い、自己表現活動では制限時間内に英文を書き上げる生徒もいた。つまり、文法操作能力と自己表現力のバランスの悪い生徒が多いことが判明した。そこで第2期検証授業では、授業の導入で自己表現活動を行い、生徒の理解・修得・表現の活動を同時に促す。</p> <p>第2期検証授業を終えて、次の四点が明らかとなった。</p> <p>①Dictogloss という形態に慣れることで、積極的に英語を「書く」姿勢が身に付いた。</p> <p>②教員が用意したヒントを活用したとしても、独自性のある英文を、全ての生徒が3分程度で書き上げることができるようになった。</p> <p>③グループ文では生徒同士で互いにメモや文法知識を補い合ったことで、使用する英単語数、英文数が一気に増えた。</p> <p>④Dictogloss のメモに矢印を自発的に、しかも効果的に使う生徒が出始めた。リスニング内容が十分に理解できていると判断できる。</p>
<p>Ⅳ 考察</p>	<p>1 Dictogloss を活用したことによる考察</p> <p>①英語を書くことに苦手意識をもっていた生徒も、積極的に英語を書く姿勢が身に付いた。</p> <p>②自分の書いたメモや英文を見直すことで、リスニングした英文について、自分は何が分かっている、何が分かっているのかを客観的に自己分析する機会を持つことができた。つまりメタ認知を働かせる機会となった。</p> <p>③「書く」活動から「話す」活動へつなぐことで、英語運用能力の向上を生徒が実感できた。</p> <p>④協働作業を通して、生徒同士の教え合いが自然発生する場となった。</p> <p>2 課題研究全体の考察</p> <p>①Dictogloss でメモを取ることが、ノートに英文を書き取る（以下、ノートテイキングとする）の訓練になる可能性が見えてきた。</p> <p>②Dictogloss 専用の教材は、日本ではまだ開発されていない。よって、今回の検証授業では、指導のポイントとなる文法を使う必然性が出るようにリスニング台本を作成した。そのことは、日本の英語教育界において有益な試みとなった。</p> <p>③Dictogloss には、学習者が表現したい内容を吟味して書く活動が含まれていない。それこそがDictogloss の学習の限界であることが分かった。したがって、自己表現活動も並行して行う必要がある。</p> <p>④メモ段階において、be 動詞や前置詞、冠詞は書かれない傾向にある。ノートテイキングの訓練にもなるので、それ自体は何の問題もない。しかしDictationと同じ要領で英文を再現すると、それらが抜け落ちたままとなる危険性がある。よって、Dictogloss ではメモに既習の文法知識を加えるように、生徒へ再度確認する必要がある。</p> <p>⑤Dictogloss 実施後に、「Dictogloss をやって気付いたこと」を各自で振り返らせ、それを文字（日本語）で書かせ、自分自身の英語力全般に関するメタ認知を整理させる機会が生徒には必要だ。例えば、「知っている単語の数自体が少ない」、「リスニングを聞き続ける集中力が無い」などといった、客観的な分析である。これによって、自分に欠けている部分に分かり、それを改善する方法も自然と見えてくるため、次回の課題とする。</p>

